

“美” について

天 野 義 和

私的なことを述べると、もう代も変わって法律的には6親等を越えると親戚とは言わないが父の従兄弟が門主をしていたお寺に京都の東福寺山門に正覚庵（東福寺塔頭正覚庵）がある。このお寺は「筆供養」の寺として名が知られ、供養の日には京都ではテレビでその様子がニュースで流されているようだ。筆の供養をするとどうなのかと言うと勿論筆を用いて文字を書くことが出来た筆に対する感謝の気持ちを表わして供養する訳なのでそのお返しと言っては変だが文字が美しく書ける御利益があるという。

学生時代に阪神デパートでの古本市で買った明治25年再版の高等女子習字帖「烏丸帖全」は“烏丸とのよわ三條殿御息女への御文”で始まる手紙の内容で流れるような本当に美しい草書の書体の写本であった。この習字帖には烏丸序があり「ものはみな花あるを賞しにほいあるをほむることなりこの烏丸帖つねに本ありにほひありまた実さへありて学び冊なり全てその文字をよみ味ひなは女子たるものうへなき宝なるへし女子の心正しければ男子を励ましむるの法ありて世のなかの為すくならず・・・」と書かれていた。10年程前に「高松宮日記」が発刊され購入した。この「高松宮日記」のタイトルは高松宮妃殿下がお書きになったと書かれていたが、高松宮日記という文字を見た瞬間にこれは烏丸帖の書体と同じような書体で公家さん関係の方は矢張りしっかりと美しい書体を身に着けられ流石だなとその時に感じた。

「“美”を形で表わすと○か△か□か何だと思う。」と当時文部省から委嘱され農村歌舞伎を調査していた義兄に言われたことがある。何と答えたかは忘れたが答えが三角形だったことを覚えている。おそらく義兄は農村歌舞伎の舞台の位置関係や歌舞伎を見てそれらの形の美しさを思い私に問いかけたのだろう。假屋崎流の生け花のようにただ華々しい現代流のものは分からないが日本古来の華道や武道、茶道においてその奥義として構えた形や古流の生け花の作られた形、すなわち真・流・受を線で結ぶと三角形になっているように全てが三角形を示すように思われる。例えば刀を構えた人と刀の切っ先を線で結ぶと三角形を呈するし、私が表千家の茶道を習いに少し通ったことがあるが、私の好きな「切り柄杓」のポーズも今思えば三角形のような気がする。常磐津とか狂言とか能も義兄に券を貰ってよく見に行ったが能舞台においても笛・太鼓・鼓で居並ぶ列と謡曲を謡う列そして舞う人の位置関係も線で結べば三角形になるように思える。古来から種々な家元とかは意識してこの三角形を頭に描いたのか、偶然に美しい形を採らせたのが結果的に三角形になったのかそれは分からない。しかし美的感覚のある人はおそらく無意識にこの三角形を形作っているような気がする。祝い事に使われるような小笠原流折形の図を見ると「男蝶、女蝶」、「香包」、「筆櫛」、「弓の弦」などは全て三角形の組み

合わせて調和を保ち、小笠原流諸般におけるの礼儀作法、襖の開け方は、江戸時代の嫁入り前の女子の道徳教本の様な「女小学」を見ると、襖の入り口の正面に座り、左手を着き、右手で襖の取っ手を持ち開け・・・こじつけてみればこれも点で繋ぐと三角形となるように思う。

それでは、音、いわゆる音色に関する“美”はどうであろうか。先日、偶然にも「世界一受けたい授業!!」とかいうのを見ていたが、ドレミファ・・・に半音を加えてこのドレミファ・・・と書いた文字を360度の円に並べ、3音を同時にひいて調和のとれた美しい音と感じた和音の文字、例えばド・ミ・ソを線で結ぶと直角三角形を示していた。調和音は三角形でも直角でないと駄目なようであったから音色に関しては漠然とした三角形では“美”に当てはまらないことを例外として挙げておかなければならない。

文章において“美”という形はあるのだろうかと言え、立体をなす形としては見る事ができないが漢詩の特に絶句に見られるように「起承転結」の文章の構成法が文章を書く上での美しい流れなのかも知れない。それでは論文においてはというと、内容はともかくとしても「起承転結」に変わる文章の構成は奥羽大学歯学誌の論文形態にも示されている「緒言、材料および方法、結果、考察と結論」ではなかろうかと考える。そして緒言で述べられているであろう目的が明確に結論で示され、ダラダラでなくスッキリと纏まって、しっかりとした内容で順序良く流れるような文体で理論に基づいた考察が述べれば、これは論文における“美”と言えるのではなかろうかと私は思う。

(奥羽大学歯学部)